

教員・学生合同研修会

臨地実習前の技能習得達成度評価の取り組みについて(実施に向けての問題点・改善点)

愛知県臨床検査技師会の連携による OSCE

岡田 元*

はじめに

藤田医科大学 医療科学部 臨床検査学科より 2018 年 3 月に公益社団法人愛知県臨床検査技師会に客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination : OSCE) への協力要請があった。当会として全面協力の意向ではあったが、公益法人として特定の学校への支援体制を構築することは避け外部評価委員を推薦する形式で合意し図に示す協力体制を構築した。2018 年度より当会会員を外部委員とした連携を開始し 2019 年度からは検査部門毎の協力委員を設けた連携体制を構築した(図 1)。

I. 2018 年度

当会の OSCE への協力について大学と当会会長、学術担当副会長で検討を行った。初年度は

当会の学術担当副会長、学術部長の 2 名を外部評価委員として委嘱し、試験当日に現場で運用についての第三者評価を行うこととした。

2018 年 10 月 3 日の午前と午後に OSCE が実施され、2 名の外部評価委員は午後から半日間査察を行った。実技内容は心電図基本操作 (患者接遇を含む)、顕微鏡基本操作 (病理標本)、遠心機取扱い基本操作 (真空採血管の分類を含む)、身だしなみであった。行われた実技試験の内容を病院の実務と比較し、実業務に沿った実技内容となるような助言、また全体の運営についての助言をまとめ、ポジティブコメントも含め報告書として提出した。

学生は分刻みで移動し、短時間で効率良く試験が行われていた。各試験の時間が短いため、実施できる試験に制限が多い中、非常に工夫されている内容であった。評価委員として短い時間に確認

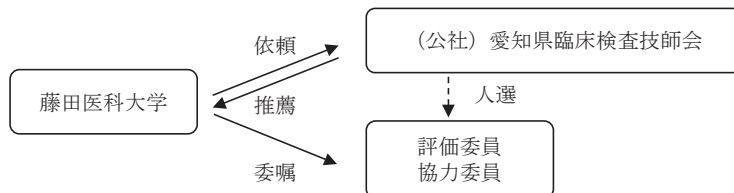


図 1 藤田医科大学との協力体制

* 藤公益社団法人 愛知県臨床検査技師会 副会長、

JA 愛知厚生連 安城更生病院 臨床検査室 室長 genokada@tg.commufa.jp

等のリスクマネジメントを取り込んでいくことについて提言させていただいた。

2018年度の初回を終え、次年度に向けての話し合いをもち、次の課題があがった。

1. 既存課題の修正や新規課題の立案
2. 課題に対する評価項目および評価基準の適正化
3. 学生のトレーニング期間・内容の適正化
4. 合否判定基準の検討・作成
5. 評価者に対する注意事項の作成
(評価者基準の作成)
6. OSCE 運営方法の検討
7. 外部評価基準の検討・作成

既存課題の修正や新規課題の立案については、当会研究班より代表者を選出し、協力委員として大学から委嘱することとした。課題に対する評価項目および評価基準、合否判定基準の検討・作成、評価者に対する注意事項の作成(評価者基準の作成)については、臨地実習前の学生の習熟度到達ポイントを定めないと作成できないため、受け入れ施設の要望も考慮した達成ポイントを定めることが望ましいと考えている。OSCEの実技試験項目の選定も含めて施設との摺り合わせが必要と考え、大学と当会だけでは無く、愛知県技師長協議会も含めて意見交換を行う機会をつくりたい。

学生のトレーニング期間・内容の適正化については試験内容(難易度)に関係してくることと、学生が感じている難易度にも関係してくるため、学生の感想にも注視しつつ適正化をはかる必要がある。

合否判定基準の検討・作成については評価の適正化と関連して明確化していくことが望ましいと考えているが、不合格であったらどうするのか?とも関係してくると考えている。現在は不合格項目については再トレーニング、再試験となっているが、受け入れ病院目線では、苦手も個性と感じているので厳しくする必要ないと考えている。

OSCEは大学側の努力により非常に効率良く適切に運営されていると感じているが、OSCEの成果を感じるのは受け入れ施設のスタッフであり接点のある患者である。成果が得られる運営形態

として3つの部門から構成するのが望ましいと感じている。①臨地実習生と直接接触している受け入れ施設で運営委員会を構成し、採り上げるべき実技内容、到達目標等を明確にし、大学に提言する体制。②運営委員会の意向に則したスキルを学生が身につけているか確認するための試験内容を検討する試験委員会。③外部評価(監査)を行い試験が適切に実施しているかを第三者的立場で評価を行い、運営委員会、試験委員会に提言する評価委員会。の3者による運営が望ましいと考えている。

II. 2019年度

本年度は課題作成から協力するために微生物検査、血液検査、生化学検査、病理検査、生理検査、一般検査、輸血検査の協力委員を推薦し委嘱した。推薦にあたっては専門能力以外に、臨地実習生指導の経験を考慮した。

初年度なので、大学が作成した試験内容について協力委員と担当教諭が打ち合わせを行い、実践的な試験課題作成に尽力した。

試験当日は昨年度とおなじ評価委員2名で試験実施について評価を実施した。試験内容は血液塗抹標本作製、ピペット操作、手指衛生、身だしなみで、前年度と同様に実業務との乖離点について助言をさせていただいた。助言内容については学校側より詳細な対応報告をいただいた。

2019年度は緻密なスケジュールを管理運営していく手法が更新され適切な運用が行われていた。実技試験と現場との乖離は少なく改善も難しくないと感じた。

III. 2020年度

2019年度と同様に実技試験内容について企画段階で協力委員と学校担当者が検討を行い、試験日当日は2名の外部評価委員が立ち会って評価を行う形式で運用した。新型コロナウイルス感染症のため実集合での打ち合わせが困難であり、メールでの打ち合わせを多用した試験内容の打ち合わせとなった。試験は尿沈渣標本作製、マイクロピペット操作、心電図基本操作、身だしなみに

ついて試験が行われた。試験当日の運用は昨年度から改善が進み完成度が高く申し分ない状況であった。本年度より知識試験が CBT : Computer Based Testing で開始されたが、内容確認および評価には至っていない。

IV. 所 感

時間的制約を受けている実技試験であるが、非常に工夫され、実際の臨床検査現場に近い形式となっている。また手技だけでは無く患者確認、検体確認の工程も盛り込まれ、「焦っていても確認は不可欠」という意識が学生にも浸透していくと感じられた。

臨地実習を受け入れている施設では、施設毎に学生が体験できる検査内容が異なり、患者と接する業務について制限されていることも多い。医療人、臨床検査技師を育てるための臨地実習に何が求めるのか受け入れ施設と学校で共通した認識をもち、「臨地実習で必要な技能態度」を具体的にすることで、学生が事前取得すべき技能が決まってくる。今回のカリキュラム改訂を機に、雇用する施設と未来の臨床検査技師の双方にメリットがあるよう、引き続き協力をしていきたい。

V. 今後の課題

当会が協力した藤田医科大学では実技能力確認として OSCE、知識能力として CBT が実施され、医療現場に送り出せる学生の育成につとめていた。今後の課題は「臨地実習を行うために必要な資質」と考えている。

当院のスタッフに臨地実習生に求めるものは何かといアンケートを行ったところ、次の回答を得た。

- ・ 元氣・挨拶・身なり・謙虚な姿勢・てきぱき行動

- ・ 敬語・返事はシッカリ・やる気を見せて欲しい
- ・ 社会人としてのマナーを守ろう
- ・ ルールを守ろう
- ・ メモをとって欲しい
- ・ 社会人と学生の違いを考えて責任感のある行動
- ・ 雑用・掃除も業務のひとつ
- ・ わからないことは聞く、何かあったら報告する

内容は検査能力や知識能力では無く、人間性、社会人性についてであった。学生には実習室と現場の違い、学校と職場の違いを理解して訪れて頂きたいと感じている。職員と良好なコミュニケーションを築くことができれば臨地実習で得ることができる成果は非常に大きなものになると感じている。これらは OSCE として実技試験を行うものではなく、事前に説明すべき事柄に分類される。当会より講師を派遣し OSCE の待ち時間等に「学校実習と臨地実習の違い」について説明することも検討したい。

知識を有した学生、検査能力を持った学生が臨地実習に訪れると、より多くのこと、より深いことを学ぶ機会が増えるため大きな意義のあることであるが、受け入れ施設が「教えたくなる学生」と感じる事ができないと残念な臨地実習となる可能性がある。様々な事柄を備えるべき臨床能力と捉え、大学側に提言していきたいと感じている。

現在は、受け入れ施設側は学生がどのような OSCE を受け、何ができるようになってきているかを知らないで実習を受け入れ、また施設毎に臨地実習生ができる業務が異なっている。当会として、カリキュラム変更も含めて、受け入れ施設の要望、学校の要望、学生の要望を討論し調整する機会が提供できるよう支援していきたい。